

第11回バトラー研究会のお知らせ



18世紀ブリテン思想史と社会的影響力の両面において重要な役割を果たしながらも、今日、忘れられた神学者、思想家と言われている Joseph Butler (1692-1752) を、ふさわしい位置に復活させようというのが本研究プロジェクトの中心的課題です。共同研究の成果を日本語だけでなく英語でも出版することを目指しています。

今回の研究会(通算第11回)では、商業社会の興隆期にイングランド国教会の聖職者として大きな影響力を持っていたバトラーが、利己心の容認から出発してどのように初期資本主義の担い手たちの行為を正当化しようとしたかについて、有江大介氏(横浜国大・名)が報告をします。併せて、大久保正健氏(元・杉野服飾大)が、バトラー研究の基軸概念としてのhuman natureの資料を分析します。

日時：2021年7月18日(日) 14:00 - 17:30

方法：Zoom会議により開催(ホスト：松本哲久・北海道教育大・研究分担者)

・トピック(会議名)：第11回バトラー研究会

・ミーティングURL、ミーティングID、パスワードは**開催当日午前中にメールにて配布**。

研究会メンバー以外にも公開しますので、**参加希望の方は以下にある「参加申込書」に記入して開催日前日(2021年7月17日・土)までに送信**してください。

<https://forms.gle/n38uhv8u55doW7Ks8>

報告：有江大介氏「18世紀商業社会とキリスト教：バトラー『説教』に見る金儲けと貧富について」
<要旨>

主著『宗教の類比』(1736)に示された蓋然性(probability)という徹底した経験論的認識論によって理神論論争を終結させたとされるジョゼフ・バトラー(Joseph Butler: 1692-1752)は、神学者であると同時に終生イングランド国教会の聖職者であり影響力の大きい説教者でもあった。実際、彼の『説教集』(1726, 1739)は現在でも一般人が簡単に手にすることができるほど幅広く受容されてきた。

本報告では第一に、バトラーの中核的主張である「利己心」を出発点にしつつ「良心」による行為の規制と義務に至る精神の3層構造把握を紹介し、第二にそれが18世紀前半の商業社会の興隆期に教会活動や礼拝への参加者が激減する状況に国教会としてどう妥協的に対応するものであったのか、第三に、ホップズとは異なる形での「利己心」を支配的な行動原理と見なす世俗化の徹底の方向が、スコットランドのヒュームやスミスによる社会・経済把握のあり方にどのような形で影響を与えたのかを示したい(報告レジュメの事前配布はありません)。

—プログラム— (司会：大久保正健・研究会事務局)

14:00-14:15 本日のプログラムの説明、並びに参加者の自己紹介

14:15-14:20 研究発表から論文集作成にむけて(発表の位置づけ)

14:20-15:10 報告「18世紀商業社会とキリスト教：バトラー『説教集』に見る金儲けと貧富について」(有江大介)

15:10-15:40 質疑

15:40-15:50 休憩(司会交代：有江大介)

15:50-16:40 資料紹介「人間本性論」について(紹介者：大久保正健)
(第11回研究会はここで終了)

以下、研究会メンバーによる事務連絡

16:40-17:20 今後の活動方針の提案と協議(翻訳本の状況と共同論文集に向けて)